

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：32305

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720134

研究課題名(和文) スコットランド・バラッド・オペラによる「スコットランドらしさ」の創出に関する研究

研究課題名(英文) A Research of the Invention of Scottishness through Scottish Ballad Opera

研究代表者

松田 幸子 (Matsuda, Yoshiko)

高崎健康福祉大学・人間発達学部・講師

研究者番号：10575103

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円、(間接経費) 360,000円

研究成果の概要(和文)：主に1730年代前半にロンドンで製作されたバラッド・オペラのうち、スコットランドを舞台としたスコットランド・バラッド・オペラを分析の対象とした。とりわけ、Theophilus CibberによるPatie and Peggy (1730)や、Joseph MitchellによるThe Highland Fair; or, Union of the Clans (1731)で用いられているスコットランド・バラッドに焦点を絞り、これらのバラッド・オペラが、親ジャコバイト的なスコットランドの知識人たちによるスコットランド・バラッド啓蒙という文脈の中で生成されていることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The research examines a series of ballad operas, produced in early 1730's in London, which has Scottish settings, focusing on the Scottish ballads such as "Auld Rob. Morris" or "Tweedside," in Patie and Peggy (1730) by Theophilus Cibber or The Highland Fair (1731) by Joseph Mitchell. It showed that the Scottish ballad operas were produced in the context of Scottish Enlightenment through pro-Jacobite intellectuals in Scotland.

研究分野：英米・英語圏文学

科研費の分科・細目：若手研究(B)

キーワード：ナショナル・アイデンティティ スコットランド・バラッド イギリス帝国化

### 1. 研究開始当初の背景

1707年、ウェールズを含むイングランドとスコットランドが併合し、連合王国としての英国(Britain)が成立した。この併合に際して、スコットランドは、イングランドとは差異化されるべき独自の文化を主張するために、バラッドを抵抗の手段として用いるようになる。このような動きの中で、18世紀初頭、スコットランドを銘打った数々のバラッド集が出版された。すなわち、このときスコットランド側は、伝統的なバラッドを政治的プロパガンダとして用いることで、ある種の「スコットランドらしさ」を創出しようとしたと考えられるのである。一方、イングランドは、スコットランドのバラッドを、無垢なロマンスや牧歌的生活について歌う甘美なものにとらえることで、政治的含意を多分に有していたスコットランド・バラッドを衛生化し、英国のものとして領有しようと試みていた。本研究は、このようなせめぎあいの中で生成されつつあった「スコットランドらしさ」すなわち、スコットランドのナショナル・アイデンティティに注目し、バラッド・オペラが、その生成、流通の場であったことを示すことを目指した。

これまでバラッド・オペラは研究の対象になってこなかった。そのため、バラッド・オペラを理解するための基礎的な資料、研究論文ともに乏しい状態にある。本研究は、同時代的な文脈に即したバラッドの変遷をたどるため、18～17世紀に出版されたバラッド集のみならず、同時代の社会的・歴史的状況に関する包括的な資料・論文を体系的に収集する。また、バラッド・オペラで用いられていたスコットランド・バラッドをリスト化し、歌詞の変遷も含めてデータベース化するため、バラッド・オペラ研究のための基盤となる資料を提供する。

### 2. 研究の目的

本研究は、バラッド・オペラで用いられているスコットランド・バラッドを網羅的にリスト化し、その意味の変遷をたどるものである。そうすることで 1) バラッド・オペラ研究の基盤を確立すること、2) 18世紀の英国において、スコットランド・バラッドが「スコットランドらしさ」を表象するものとして立ち現れつつあったことを示し、そのようなナショナル・アイデンティティを創出・流通させる場として、バラッド・オペラが機能していたことを明らかにするのが、本研究の目的である。

### 3. 研究の方法

バラッド・オペラの中でも、スコットランド発祥(とされる)のバラッドを用いたものに分析の対象を限定する。Rubsamenによるバラッド・オペラ選集の中から数点の作品を選び、1)そこで用いられているスコットランド・バラッドの17～18世紀における歌詞の

変遷をたどり、リスト化した。さらに、それを元に 2) スコットランド・バラッドを用いたバラッド・オペラによる「スコットランドらしさ」、すなわちスコットランドのナショナル・アイデンティティ創出のプロセスを明らかにした。

具体的には、1) ある特定のメロディにつけられたそれぞれの歌詞の変遷を年代ごとにたどった。バラッドの歌詞は収録されたバラッド集成等の版や用いられた戯曲ごとに改変されている。本研究では、収集した資料を基に、特定のバラッドの歌詞の比較・照合を行い、その変遷を確認し、年代ごとにリスト化した。2) 上記リストに基づいて、バラッド・オペラをスコットランドのナショナル・アイデンティティの観点から分析した。このような改変は、もちろん、それぞれの時代状況、社会状況、さらには歌唱集、バラッド集成出版の意図、そのバラッドを用いた戯曲の内容に応じて行われている。したがって、本研究はバラッドによってどのようなスコットランドのイメージが形成されているのか、さらに、そのバラッドを用いているバラッド・オペラがどのようなものとしてスコットランドを表象しているのかについて、スコットランドのナショナル・アイデンティティの観点から考察した。3) アウトプットとしての国内・国外発表、データベース化。上記2点の作業によって得られた結果を、国内外で報告し、当該分野の研究者と、研究内容の妥当性について意見交換をおこなった。また、バラッド・オペラで用いられているスコットランド・バラッドの収録テキスト、版、歌詞等についてのデータベースを作成し、オンライン上で公開する準備を進めることで、今後のバラッド研究、あるいはバラッド・オペラ研究の基礎的な資料を提供する。

### 4. 研究成果

#### (1) 平成23年度

現時点で入手しているバラッド・オペラとスコットランド・バラッドについての基礎資料の整理と、研究対象とするバラッド・オペラの選定。また、これまでの研究成果について、第83回日本英文学会(北九州市立大学)のシンポジウム「近代イギリス演劇におけるスペクタクルと音楽」において、バラッド・オペラについて発表した。さらに、大英図書館、スコットランド国立図書館に赴き、スコットランド・バラッド・オペラで用いられているバラッドの、ブロードサイド版を確認し、17世紀から18世紀にロンドンとエジンバラで出版された歌唱集(Song Book)、バラッド集に収録されているヴァージョンをリストアップした。バラッド・オペラで用いられているバラッドは、どの版によるものなのか、あるいは、ある特定のメロディをもったバラッドがどのように流通し、それぞれの時代状況に応じて、どのような意味を担っていたのかを明らかにするために、上記の施設

に赴き、直接にそれぞれの版を確認する必要があった。現在の時点で、調査の対象としたのは、各バラッドのブロードサイドと、Thomas D'Urfey 編の *Wit and Mirth, or Pills to Purge Melancholy* (1698-1720)、Allan Ramsay 編の *The Tea-Table Miscellany* (1724)である。また、上記の資料収集・調査を元に、バラッドによって、「スコットランドらしさ」すなわち、スコットランドのナショナル・アイデンティティが生成されるプロセスを確認した。

## (2) 平成 24 年度

9月と3月に筑波大学付属図書館に資料調査に赴き、当該図書館所蔵のバラッド・オペラ選集 *The Ballad Opera: A Collection of 171 Original Texts of Musical Play* (1974)に基づいて、スコットランド・バラッドを用いたバラッド・オペラの選別を行うとともに、それぞれのバラッドのリスト化を行った。その際、同時期にスコットランドだけではなく、ウェールズ、アイルランドといったブリテン島の周縁についてのバラッド・オペラも制作され、スコットランド・バラッドと混同されていたことが判明した。また、リスト化に基づいて、用いられていたバラッドの異動を調査。分析し、論文「18世紀英国の劇場によるスコットランド・バラッドの包摂と「スコットランド的なるもの」の創出について」『高崎健康福祉大学紀要』第12号(2013)を発表した。ここでは、スコットランド・バラッドが、ロンドンの劇場においては、政治的危険性をはらんだ諷刺のバラッドとしてではなく、素朴で甘美なパストラル空間としてのスコットランド像を形成するのに用いられていることを明らかにした。さらに、この時明らかになったパストラル空間としてのスコットランド像に注目し、1690年代にイングランド・スコットランドのバラッドを収集し、バラッド集 *Wit and Mirth, or Pills to Purge Melancholy*(1698-1720)を出版した Thomas D'Urfey の芝居である、*The Injured Princess* を調査、研究し、オベロン会にて「Un-British *Cymbeline: The Injured Princess* (1682)におけるパストラルの破綻」(国際文化会館、10月27日)を発表した。

## (3) 平成 25 年度

前年度までの調査に基づき、スコットランド・バラッドが、スコットランドをパストラル的空間として想像する言説と絡み合っていることをさらに追及した。そのようなパストラル的空間としてのスコットランド像が形成されるにいたった過程を確認するために、17世紀後半、王政復古期の演劇におけるバラッドの使用について、調査を行い、第52回シェイクスピア学会(鹿児島大学、10月5日)にて、研究成果発表を行った。また、このようなバラッドを用いてのスコットラン

ド像生成過程に、スコットランドの詩人アラン・ラムゼイが関わっていたことをふまえて、ラムゼイの著作についての調査を行った。その結果、ラムゼイの著作が、スコットランドを啓蒙しようとする意図を持っていたことを明らかにし、これらの研究成果をオベロン会9月例会(国際文化会館、9月28日)で行い、参加した研究者から有益な助言を得た。さらに、3月に、ラトガーズ大学(Rutgers University, Newark, US)において、スコットランド・バラッドの伝播に関する、追加調査を行った。これらの調査・研究成果をまとめると、以下の通りになる。18世紀イングランドにおけるスコットランド・バラッド・オペラと、「スコットランドらしさ」あるいは「スコットランド像」の形成について、1) イングランドで制作されたバラッド・オペラと、そこで使用されたスコットランド・バラッドと、2) スコットランドの知識人による牧歌詩の両面から分析することができた。とりわけ、『パティとペギー』(Patie and Peggy, 1731)、『ハイランド・フェア』(The Highland Fair, 1731)等、1730年代に制作された、スコットランドを舞台にしたバラッド・オペラと、そのバラッドの歌詞の変遷の分析から、スコットランド・バラッドの使用によって、ロンドンの劇場では、自然を愛する無垢で牧歌的なスコットランド像が形成されていったことを明らかにした。さらに、スコットランドの詩人アラン・ラムゼイ(Allan Ramsay)のいくつかのバラッド集と、牧歌詩『優しい羊飼い』(The Gentle Shepherd, 1725)を分析し、そのような牧歌的スコットランド像は、いわばスコットランドの穏健なジャコバイト知識人の、スコットランドの伝統を発見・保持しつつ、イングランドとの融和を模索しようとする、生き残りの戦略によっても生成されていったことを明らかにした。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### 〔雑誌論文〕(計 2件)

松田幸子、18世紀英国の劇場によるスコットランド・バラッドの包摂と「スコットランド的なるもの」の創出、高崎健康福祉大学紀要、査読有、第12号、2013、127-140  
松田幸子、啓蒙の場としてのスコットランド、OBERON、40巻1号、2014、28-37

### 〔学会発表〕(計 4件)

松田幸子、*The Injured Princess* (1682)におけるパストラルの破綻：Cymbeline 改作にみるブリテン像の変遷、第52回日本シェイクスピア学会、2013年10月5日、鹿児島大学  
松田幸子、スコットランドはいかにしてパストラルとなったか：The Gentle Shepherd (1728)を読む、オベロン会9月

例会、2013年9月28日、国際文化会館  
松田幸子、Un-British Cymbeline:  
Injured Princess におけるパストラルの  
破綻、オペロン会10月例会、2012年10  
月27日、国際文化会館  
松田幸子、バラッド・オペラとスコット  
ランド・バラッドからみるイギリス演劇、  
第83回日本英文学会、2011年5月21日、  
北九州市立大学